



## 第3回日本リビングウィル研究会四国地方会

### 開催報告

- 開催日時：平成29年2月12日（日）13:30～16:30
- 開催場所：近森病院管理棟 3F 会議室  
（高知市北本町1丁目1-28）
- 来聴者数：140人（会員55人・非会員85人）

#### ■ 基本テーマ：

“いい人生だった ありがとう”を終えるために ～人生の最後をどこで どのように～

#### ■ 記念講演：家族を幸せに看取るためにすべきこと

#### ■ 講師：長尾和宏

（一般財団法人日本尊厳死協会副理事長、長尾クリニック（尼崎市）院長・医学博士）

#### ■ パネルディスカッション：

座長：北村龍彦氏（一般財団法人日本尊厳死協会四国支部副支部長（高知代表）、近森病院理事）

パネラー 筒井早智子 有識者代表（公益社団法人高知県自治研究センター理事長）

パネラー 岡林弘毅 高知県医師会会長

パネラー 松本 務 あおぞら診療所医師

パネラー 小松倫子 訪問看護ステーション土佐所長

パネラー 上田雄一 患者家族代表（会員）

コメンテーター 長尾和宏副理事長

#### 【内 容】

会場は補助椅子を出すほどの満杯、関係者の事前広報活動、特に野中支部理事（高知）による地方新聞でLWの必要性を解説し、講演会への来場を一般に呼びかけた記事が功を奏したと思われる。

#### 基調講演で、

長尾副理事長が「家族を幸せに看取るためにすべきこと」と題し、終末期医療の家族対応について述べた。

「終末期での自分の医療が家族の判断で決まっている」と現状を指摘、知名人の終末期医療の事例と動画を交えて語り、本人の希望をかなえるためには「自分の意志を堅持し、医師や家族との十分な話し合いとLWの準備が必要」と強調した。

「亡くなる方で、ピンピンころりは5%で終末期がないが、残り95%の人に終末期がある」と話し、「人生は脱水への旅で、終末期は栄養補給や望まない治療を受けなくて枯れるのを待つのが痛みも苦しみも和らぎ幸せな最期、これが平穏死・自然死だ」、「終末期以降は過剰な医療行為はひかえて、緩和ケアを主体にした穏やかな治療を受けるのが尊厳死」だと語り、「“いい人生だった ありがとう”と終えることができる」と説いた。

#### パネルディスカッションで、

あおぞら診療所の松本務医師は、幸せな人生を終えるための病院及び在宅での緩和ケアについて自らの診療経験を語った。また「医師は在宅医療についてあまり勉強していない」と指摘し、患者や家族の気持ちを把握し、緩和ケアから看取りまで出来る、かかりつけ医の充実を説いた。

訪問看護ステーション土佐の小松倫子所長は「在宅で療養している方の訪問看護・介護と看取りを、医師、ケアマネージャーや病院と連携して対応している」と話し、「心配や不安などあれば、24時間対応しているので問い合せて欲しい」と呼びかけた。

高知県医師会の岡林弘毅会長は終末期医療に対する日本医師会の見解として、終末期の定義や医療のガイドラインについて説明、「ガイドライン等の既存の公的規範の周知徹底と現場での適切な運用に責任を持って取り組むべきことを会員に推奨している」と語った。

法制化については「患者の権利が制約される懸念があり慎重に対応すべき」とし、「法制化の前にLWなどの患者の意思を尊重した終末期医療の体制整備、厚労省や日医のガイドラインの実効的実施に向けて一層の努力を払うべき」と述べた。

また、「患者の尊厳を保ちながら終末期を見ていくのが本来医師の役割の一つであり、国民にも尊厳ある死について考えてもらい、自分の死はこう迎えたいと言う指示書を生前に示してもらうことが必要ではないか」との、横倉会長の生命倫理懇談会への諮問にも言及した。

有識者及び患者の立場から、公益社団法人高知県自治研究センターの筒井早智子理事長と上田雄一支部理事が、身内の介護体験を語り、高齢化で独居老人や老齢介護者が増える中、高齢者医療制度に対する疑問や不安、延命治療の拒絶に対し施設からの退去を要請された場合にどうしたらいいのかなど問題を提起した。

座長の北村龍彦副支部長(高知代表)が問題提起事項についてパネラーやコメンテーターに意見を求め、会場からの質問にも対応し、終末期のLWや医療・看護・介護の在り方について話し合いに努めた。

今回の講演、話し合いを通じて、基本テーマを生かすには、「LWの準備・家族との話し合い・医師へのアプローチが必要」と総括し、会場に呼びかけた。